

寺田寅彦

先生への通信





# 先生への通信



## ヴェニスから

お寺の鳩はとに豆を買ってやることは日本に限ることと思  
っていましたがこのサンマルコのお寺の前でも同じこ  
とをやっています。ただし豆ではなくてとうもろこしを  
細長い円錐形えんすいけいの紙袋につめたのを売っています。

大道で鍋なべを煮立たせて、ゆでだこを売っている男がい  
ました。

ヴェニスの町は朽ちよごれているが、それは美しく朽

ちよごれているので壁のはがれたのも、ないしは窓からぶら下げたせんたく物までも、ことごとく言うに言われぬ美しくくすんだいい色彩を示しています。霜枯れ時だのに、美しい常磐木ときわの緑と、青玉のような水の色とが古びた家の黄や赤や茶によくうつります。

ゴンドラもおもしろく、貧しい女も美しく見えます。

(明治四十三年一月、東京朝日新聞)

## ローマから

ローマへ来て累々たる廃墟はいきよの間を彷徨ほうこうしています。きようは市街を離れてアルバノの湖からロツカデイパアのほうへ古い火山の跡を見に参りました。至るところの山腹にはオリーブの実が熟して、その下には羊の群れが遊んでいます。山路で、大原女おはらめのように頭の上へ枯れ枝と蝙蝠傘こうもりがさを一度に束ねたのを載つけて、靴下くつしたをあみながら歩いて来る女に会いました。角つのの長い牛に材木車を引か

せて来るのもあれば、驢馬ろばに炭俵を積んで来るのもあり  
ました。みかんの木もあれば竹もあります。目と髪の黒  
い女が水たまりのまわりに集まってせんたくをしている  
そばには鶏が群れ遊び、豚が路傍で鳴いています。バチ  
カンも一部見ましたが、この名物はうまい物ばかりの  
ようであります。

(明治四十三年二月、東京朝日新聞)



## ベルリンから（一）

今このベルリイナア座で「タイフン」という芝居をやっています。作者はハンガリー人で、日本の留学生のことを仕組んだものだそうです。たいへん人気がいいそうですね。あります。主人公の日本人の名がドクトル・タケラモ・ニトベというのだそうで、このタケラモだけでも行って見る気がしなくなります。人の話によるとなかなかよく日本人の特性をうがっていて、むしろ日本人の美点

を表現しているそうですが、タケラモに恐れてまだ見ません。

(明治四十三年四月、東京朝日新聞)

## ベルリンから (二)

今度の旅行中は天気の良い日が多くて、ことにスイスでは雨や霧のためにアルプスの雪も見えず、割合につま

りませんでした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天気がよくておもしろうございました。寒暖計を一本下げて気温を測ったりして歩きました。つるはしのような杖つえをさげて繩なわを肩にかついだ案内者が、英語でガイドはいらぬかと言うから、お前は英語を話すかときくと、いいえと言いました。すべらない用心に靴くつの上へ靴下をはいて、一人で氷河を渡りました。いい心持ちでした。氷河の向こう側はモーヴェ・パーという険路で、高山植物が山の間の花をつづり、ところどころに滝があります。ここから谷へおりる途中に、小さなタヴァンとい

ったような家の前を通ったら、後ろから一人追っかけて来て、お前は日本人ではないかとききますから、そうだと答えたら、私は英人でウエストンというものだが、日本には八年間もいてあらゆる高山へ登り、富士<sup>ふじ</sup>へは六回登ったことがあると話しました。その細君は宿屋の前の草原で靴下を編んでいました。そこから谷底へおりてシヤモニの村まで歩きましたが、道ばたの牧場には首へ鈴をつけた牛が放し飼いにしてあって、その鈴の音が非常にメロディアスに聞こえます。また番人の子供やばあさんもほんとうに絵のようで愉快でした。日本にもあるよ

うな秋草が咲いていたり、踏切番の小屋に菊が咲いていたり、路傍のマリヤのみ堂に花が供えてあるのも見ました。シャモニの町へはいるころには、もう日が暮れかかって、まっかな夕日がブゾンの氷河の頂を染めた時は実にきれいでした。村の町には名物の瑪瑙めのうざい細工やら牛の角細工を並べた店ばかり連なって、こういう所にはおきまりのキネマが自働ピアノで客を呼んでいました。パリあたりから来ているらしい派手な服装をした女が散歩していました。

シャモニからゼネヴへ帰って、郊外に老学者サラサン

氏をたずねました。たいへん喜んで迎えてくれ、自分の馬車にのせて町じゆうを案内してくれました。昼飯をよばれてから後にその広い所有地を見て歩きました。この人の細君が私どもの論文を仏訳してここの学術雑誌に載せてくれたのだそうです。ここはもうフランスの国境近くで、屋敷のベランダから牧場越しに国境の森が見え、またヴォルテールの住まっていたという家も見えます。毛氈もうせんのような草原に二百年もたった柏かしわの木や、百年余の栗くりの木がぽつぽつ並んで、その間をうねった小道が通っています。地所の片すみに地中から空気を吹き出した

り吸い込んだりする井戸があつて、そこでその理屈を説明して聞かせました。低気圧が来る時には噴出が盛んになつて麦藁帽むぎわらぼうくらい噴ふき上げるなどと話しました。それから小作人の住宅や牛小屋、豚小屋、糞堆ふんたいまで見て歩きました。小作人らに一々アローと声をかけて、一言二言話していました。農家の建て方など古い昔のままだそうです。

屋敷の入り口から玄関までは椽とちの並み木がつづいています。その両わきはりんご畑でちようどりんごが赤く熟していました。書齋にはローマで買って来たという大理

石の半身像が幾つもある。サラサン氏は一々その頭をなでその顔をさすって見せるのでした。その中に一つ頭の大きな少年の像があつてたいへんにいい顔をしている。

先生の一番目の嬢さんがまだ子供の時分この半身像にすっかりラヴしてしまつて、おとうさんの椅子いすを踏み台にしては石像に接吻せつぶんしたそうです。そのさまを油絵にかかした額が客間にかかつていました。霧があつて小雨が降つて、誠に静かな日でした。

ゼネヴからベルン、チューリヒ、ルツエルンなどを見て回りました。ルツエルンには戦争と平和の博物館とい



うのがあって、日露戦争の部には俗悪な錦絵にしきえがたくさん陳列してあったので少しいやになりました。至るところの谷や斜面には牧場が連なり、りんごが実って、美しい国だと思いました。

それからストラスブルクを見て、ニュルンベルクへ参りました。中世のドイツを見るような気がしておもしろうございました。市庁ラートハウスの床下の囚獄を見た時は、若い娘さんがランプをさげて案内してくれました。罪人は藁わらも何もない板の寢床にねかされて、パンも水ももらえなかったと話しました。いっしょに行ったチロル

帽の老人がいろいろ質問を出すけれども、娘の案内者は詳しい事は何も知らないので要領を得ませんでした。これから地下の廊下を十五分も行くと深い井戸があるが見に行きますかという。しかし老人の細君が不賛成を唱えてとうとう見ずに引き返しました。それから画伯とみふだデユラーの住居の跡も見ましたが、その入場券が富札とみふだになっていきます。名高い古城の片すみには昔の刑具を陳列した塔があります。色の青い小さい女が説明して歩く。いつしよに見て歩いた学生ふうの男がこの案内者に「お前さんのように毎日朝から晩まで身の毛のよだつような話を

繰り返していてそれでなんともありませんか」と意地の悪いことをきくと女はただ苦笑していました。私はその埋め合わせのようなつもりで、絵はがきを少々ばかり買ってやりました。そうして白銅一つやって逃げて来ました。ミュンヘンでは四日泊まりました。ピナコテークの画堂ではムリロやデユラーやベクリンなどを飽くほど見て来ました。それからドレスデンやらエナへ行つて後、ワイマールに二時間ばかりとどまって、ゲエテとシラーの家を見ました。ゲエテが死ぬ前に庭の土を取り寄せて皿すけへ入れて分析しようとしていたら、急に悪くなったの

だそうで、書齋の窓の下の高い書架の上に土を入れた皿が今でも置いてあります。隣の寝室へかつぎ込んだが、寝台の上へ横になることができなくて肱掛椅子ひじかかりいすにもたれたままだったそうです。椅子いすの横の台の上には薬びんと急須きゆうすと茶わんとが当時のままに置いてあります。書齋の机でも寝室でも意外に質素なもので驚きました。二階の室々へやべやにはいろいろな遺物など並べてありますが、私にはゲーテの実験に使った物理器械や標本などがおもしろうございました。シラーの家はいつそう質素と言うよりはむしろ貧しいくらいでした。ゲーテの家には制服を

着けた立派な番人が数人いましたが、シラーのほうには猫背ねこぜの女がただ一人番していました。裏庭の向こう側の窓はもうよその家で、職人が何か細工をしていたようです。シラー町の突き当たりの角かどは大きな当世ふうのカツフェーで、ガラス窓の中から二十世紀の男女が、通りかかった毛色の変わった私を珍しそうに見物していました。町も辻つじも落ち葉が散り敷いて、古い煉瓦れんがの壁には血の色をした蔓つたがからみ、あたたかい日光は宮城の番兵の兜かぶとに光っております。

私はもう十日ばかりでベルリンを引き上げ、ゲツチン

ゲンへ参ります。

(明治四十三年十月、東京朝日新聞)

## ゲツチンゲンから

去年の降ワイナハト誕祭は旅でしました。ウィーンで夜おそく町をうろついて、タンネンバウムを売っているのを見た時にちようど門松と同じだと思ったのと、ヴェネデイヒで

二十五日の晩おびただしい人が狭い暗い町をただぞろぞろ歩くのを見てさびしい思いをしたきりでしたが、ことしはここの田舎いなかで田舎らしい純粹の降誕祭ワイナハトを経験しました。二十二日の晩宿の主婦から、天主教カトリックの幼稚園キンダアガルテンで降誕祭ワイナハトフェストがあるから行かぬかと誘われたので行って見ました。主婦と娘と、家事の見習いかたがた手伝いに来ているというスチューバー嬢と四人で行きました。狭い室へやにおもちやのような小さい低い机と椅子いすを並べて、それにいっぱい子供がうようよしている。みんな貧しそうな子ばかりで、中には風邪かぜを引いたのがだいぶあって、

かわいそうに絶えず咳せきをして騒々しい。白の頭巾ずきんに黒服で丸く肥ふとった尼たちシユエスターが二人そばに立って監督している。室の後方の扉とびらがあいている外側には、このへんの貧民がいっぱい立って騒々しく話している。机に並べられた子供の中には延び上がって後ろの群集を珍しそうにながめるのもあります。するとシユエスターが立って行って、頭をパタパタとたたいて向こうむきにすわらせる。そのうちに一人の子が、群集の中から阿母おふくろの顔を見つけて、急に恋しくなつて泣き出した。シユエスターが抱いて母親の所へつれて行ってやっとなすかして席



へつかしたが、やはり洗面をしては後ろを向いている。  
 おおぜいの子供の中にはあくびをしているのもある。眠  
 くてコクリコクリするのもあります。堂のすみには大き  
 なタンネンバウムが立ててあってシユエスターが蠟燭ろうそくに  
 火をつけ始めるとみんなそっちを見る。樹バウムの下の小さ  
 なお堂の中に人形の基督孩児クリストキンドが寝ている。やがて背中に  
 紗しやの翼のはえた、頭に金の冠を着た子供の天使が二人出  
 て来て基督孩児クリストキンドの両側に立つ。天使の一人はたいへん咳せき  
 が出て苦しそうで背中の翼がふるえているが、それでも  
 我慢して一生懸命にすましている。そして大きなかわい

い目をして私の顔を珍しそうに見ていました。そのうち  
フアーター  
老僧が出て来て挨拶あいさつを始めました。あまり立派でない  
が  
外套がいとうを着たままで、めがねの上から子供とお客とを等分  
に見ながら、鼻へ掛かった声でだいぶ長く述べ立てまし  
た。ワイナハトの起原などから話しましたが、子供の咳せき  
は絶え間なしで騒々しく、咳の出ない子はだいぶ退屈し  
ているようでした。きょう子供の贈ゲシエンク物にする人形の着  
物をほとんど一手で縫うたシユエスター何某が、病気で  
欠席されたのは遺憾でありますというような挨拶あいさつもあり  
ました。この挨拶が済むと、監督の尼さんが音頭をとつ

て、子供の唱歌が始まり、それから正面の壇へ大きい子供がかわるがわる出て暗唱をすると、尼さんが心配して下から小さい声でいっしよに暗唱するのでした。それからワイナハトマンが袋をかついで出て来ておどけて笑わせて、それで式が済みお客さんはみんな別室へは行って、ここへ陳列した子供への贈物を一覧するわけでした。なるほどこれは子供が喜ぶことだろうと思いました。式が済むと、室へやの外にいた貧民が一時に押し込んで施与を受けようとするので、なかなかの大混雑で、やっとの事が出て来ました。

降誕祭前一週間ほど、市役所前の広場に歳としの市いちが立つて、安物のおもちやや駄菓子だがしなどの露店が並びましたが、いつ行つて見ても不景気でお客さんはあまり無いようでした。売り手のじいさんやばあさんも長い煙管きせるを吹かしたり編み物をしているのでありました。ひやかしていると、「ドクトルの旦那だんなさん、降誕祭贈物ワイナハトゲシエンクはいかがです」と呼びかけるのもありました。町の店屋へ買い物に行くと、お前さんの故国でもワイナハトを祝うかなぞときくのがだいぶありました。

降誕祭ワイナハトの初めの日には、主婦かみさんが、タンネンバウム

を飾るから手伝ってくれぬかと言うので、お手伝いしました。たいそう古くなったお菓子を黄色いリボンで縛ったのが一箱あって、これもつるすのだといって、もみ縦の木へほかの飾り物といっしよにつるしました。これは十四年前におばあさんが買ったお菓子だということでした。同じ宿にいる女優のスタルク嬢も、前だれなどかけて三階から降りて来て手伝いました。いちばん高い枝につるすには梯子はしごが入用でした。あぶないと言ったがきかないで、スタルク嬢がつるしました。その夜の十一時の汽車で主婦かみさんのむすこが帰って来るということでした。こ

のむすこも娘も主婦さんの継子ままこだそうです。むすこはエーベルフェルドの電気工場に勤めているそうで、それがワイナハトには久しぶりで帰るといっているので、この間じゅうから妹娘が贈物ゲシエンクする襟飾えりかざりを編んでいました。とうとうできあがらないとこぼしていました。都合で夕食後にバウムに灯ひをつけました。きれいでした。室へやの片側へ机を並べて、皆一同の贈物が陳列してありました。二人の下女もそれぞれ反物をもらって喜んでいました。親子が贈物を取りかわし「ムッター」「ヘレーネ」とお互いに接吻せつぶんするのはちよつと不思議に思われました。主婦がピ

アノの前にすわって、みんなでワイナハトの歌をうたいました。雪のふるのがほんとうだそうですが、この晩は暴風雨のような雨が降ってひどい天気でした。記念にバウムの写真をとりたいたいと思って、町へマグネシウムを買いに出ましたら、町の家々の窓にもワイナハトバウムの光が映って、ところどころ音楽も聞こえて愉快そうに見えました。十一時過ぎにむすこが帰って来ましたが、私はもう室<sup>へや</sup>へ帰って床の中で新聞を見ていましたから、その夜は会いませんでした。夜ふけるまで隣の室で低い話し声が聞こえていました。むすこはそれから三日目の晩

食後に帰って行きましたが、その晩食の席で主婦がサンドウィッチをこしらえて新聞に包んでやりました。汽車の着くのは夜半だからといって、いちばん厚いパンの切れを選よっていました。食事が済んで汽車の出るまでだいぶ間があるので、むすこはピアノの前へすわってワイナハトの歌などひいていました。主婦かみさんとむすこは始終いろいろ話しておりましたが、兄妹の間にはいっようなんの話もありませんでした。それでもネクタイはやつとできあがったそうでした。

ゆうべはジルヴェスターアーベンドというので、また



バウムに蠟燭ろうそくをともしました。そして食後にあたたかい  
 プンシュを飲んで、お菓子をかじりました。食堂の棚た  
 なに飾ってある葡萄ぶどうが毎日少しずつなくなるのは不思議  
 だという話が出ました。きょうはたった四つになったと  
 言ってわざわざ見せてくれました。ある主婦が盗み食い  
 をする下女を懲らすためにお菓子の中へ吐剤を入れてお  
 いた話も聞きました。スタルク嬢は下稽古したげいこでおそくなっ  
 てやって来ました。この人はいつでも忙しい忙しいとい  
 っています。田舎芝居いなかしばいで毎日変わった物を演ずるので、  
 下読みが忙しいそうです。ある日、いつも外出する時間

に出ないで室へやにいましたら、隣の食堂で下読みが始まってちよつと驚きました。あとで聞いたらレツシングの「ミンナ・フォン・バルンヘルム」とかであったそうです。

この大晦日おおみそかの晩十二時に日本へ送る年賀状を出しに出ました。町の辻つじで子供が二三人雪を往来の人に投げつけていました。市役所のへんまで行くと暗やみの広場に人がおおぜいよつていて、町の家うちの二階三階からは寒いのに窓をあけて下をのぞいている人々の顔が見える。市役所の時計が十二時を打つと同時に隣のヨハン会堂キルへの鐘が鳴り出す。群集が一度にプロージット・ノイヤー

ル、プロージット・ノイヤールと叫ぶ。爆竹に火をつけて群集の中へ投げ出す。赤や青の火の玉を投げ上げる。遅れて来る人々もあちこちの横町からプロージット・ノイヤールと口々に叫ぶ。町の雪は半分泥どろのようになった上を爪立つまだって走る女もあれば、五六人隊を組んで歌って通る若者もある。巡査もにこにこして、時々プロージットの返答をしている。学生が郵便配達をつかまえて、ビールの息とシガラの煙を吹きかけながら、ことしもまたうんと書留を持って来てくれよなどと言って困らせている。ふざけて抱き合う拍子にくわえたシガーが泥どろの上へ

落ちたのを拾ってはまた吸っています。プラッツのすみのほうに銅壺どうこをすえてプリンシュを売っている男もありました。寺の鐘は十五分ほど鳴っていました。帰って来る途中のさびしい町でもところどころ窓から外を見ている人がありました。帰って寝ようと思ったら窓の下でだれかプロージット・ノイヤールと大きな声がして、向こうの家からプロージットプロージットとそれに答えているのが聞こえました。

書いている間に日が暮れました。いっこう元日らしいところはありませぬ。きょうから隣の空室へ判事試補マ

イヤー君が宿をとりました。法科のベルナー君や理科のデフレツガア君などは目下郷里へ帰ってたいへん静かです。

長々と書いたもののいっこうつまらなくなりました。

(明治四十四年二月、東京朝日新聞)

## パリから（一）

私の宿はオペラの近くでちよつと引つ込んだ裏町にあります。二三町出るとブルバール・デジタリアンの大通りです。たいてい毎朝ここへ出て角で新聞かどを買います。初めてノートルダムに行った日はここから乗合馬車に乗ってまずバスチールの辻つじまで行きました。音に聞いた囚獄は跡方もありません。七月の碑という高い記念碑がそびえているばかりです。頂上には自由の神様が引きち

ぎった鎖と松明たいまつを持って立っています。恐ろしい風の強い日で空にはちぎれた雲が飛んでいるので、仰いで見ているとこの神像が空を駆けるように見えました。辻の広場には塵ちりや紙切れが渦巻うずまいていました。

広場に向かって Au canon という料理屋があつて、軒の上で大砲の看板が載せてあります。ここからまた馬車の二階に乗ってオテルドヴィーユまで行きました。通りの片側には八百屋物やおやものを載せた小車が並んでいます。売子は多くばあさんで黒い頬冠ほおかぶり黒い肩掛けをしています。います。市庁の前で馬車を降りてノートルダムまで渦巻うずまきの

風の中を泳いで行きました。どこでも名高いお寺といえ  
ばみんな一ぺん煤すすでいぶしていぶし上げてそれからざつ  
とささらに洗い流したような感じがしますが、このお寺  
もそうです。ほかの名高い伽藍がらんにくらべて別に立派なと  
も思いませんが両側に相對してそびえた鐘樓がちよつと  
変わった感じを与えます。入り口をはいるとここに限ら  
ず一時まっ暗になる。足もとから不意に鋭い声でプール  
・レ・ポーヴルと呼びかける。まっ白い大きな頭巾ずきんを着  
た尼さんが袋をさし出している。袋の底から銀貨が光つ  
ていました。はいつて来る信徒らは皆入り口の壁や柱に



ある手水鉢ちようずばちに指の先をちよつと入れて、額へ持つて行って胸へおろしてそれから左の乳から右の乳へ十字をかく。堂のわきのマドンナやクリストのお像にはお蠟燭ろうそくがともつて二三人ずつその前にひざまずいて祈つている。蠟燭を売るばあさんがじろじろと私を見る。堂のまん中へ立って高い色ガラスの窓から照らす日光を仰いで見るのはやはりよい心持ちがします。午後でしたからお勤めはありません。しかし時々オルガンの低い音が響いたり消えたりしていました。右側の回廊の柱の下にマドンナの立像があつてその下にところどころ活版ずりの祈き

禱とうの文句が額になつてかけてあります。この祈禱をここですれば大僧正から百日間のアンジュルジャンスを与えらるとある。「年ふるみ像のみ前にひれふしノートルダームのみ名によりて祈りまつる、わが神のみ母よ……」と  
いうような文句であります。数世紀の間パリの喜び悲しみをわれらの祖先がここにこの像の前に喜び悲しんだと  
いうような文句がある。若い女が黒い紗しゃで顔をかくして  
手に長い蠟燭ろうそくを持って像の前に立った。そして欄にもたれてひざまずいてじつとしている。美しい肩が時々波を  
打って、帽子の黒い鳥の羽がふるえるように見えました。

マドンナのすぐわきにジャンダークの石膏像せつこうぞうがある。この像の仕上げのために喜捨を募るといふ張り札がしてある。回廊の引っ込んだ所には、僧侶そうりよが懺悔ざんげをきく所がいくつもある。一昨年始めてイタリアのお寺でこの懺悔ざんげをしているところを見ていやな感じがしてから、この仕掛けを見るごとに僧侶を憎み信徒をかわいく思います。奥の廊下の扉とびらのわきに「宝蔵見物のかたはここで番人をお待ちくだされたし」といふ張り札がしてある。その前で坊さんが二人立ち話をしている。

門を出ると外はからっ風が吹きあれていました。堂の

前を右へ回ると塔へ上る階段がある。

薄暗い螺旋形らせんけいの狭い階段を上って行く。壁には一面のらく書きがしてある。たいてい見物人の名前らしい。登りつめて中段の回廊へ出る。少し霧がかかってはいるが、サンデニからボアのほうまでも見渡される。鐘楼の下とびらの扉が開いて女が顔を出した。そして塔へ上りますかといつて塔の入り口の扉を開く。

「おりて来たらここをたたいてください」といって、ドンドン扉をたたいて見せて、私を塔の中へ閉じこめてしまった。まっ暗な階段を手探りながら登って行って頂上

に出る。ひどい風で帽子は着ていられぬ。帽子を脱ぐと髪を吹き乱す。やっとベデカの図を開いてパリじゅうを見おろす。塔の頂の洗いさらされた石材には貝がらの化石が一面についている。寺の歴史やパリの歴史もおもしろいが、この太古の貝がらの歴史も私にはおもしろい。屋根のトタンにも石にも一面に名前や日付が刻みつけてあります。塔をおりて扉とびらをドンドンたたく。しばらく待つてもあけてくれぬ。またドンドン靴くつでける。しばらく待っているとやっとなげてくれた。入れちがいにもまた一人塔へ上る人があって、これにも同じ事をいって

外から錠をおろす。「セバストポールの鐘をござらんない」と先に立って、反対の側の鐘楼へ導く。黒の頬冠ほおかぶり、黒の肩掛けで、後ろの裳もはぼろぼろにきれかかっている。欄干から恐ろしい怪物の形がいくつもパリを見おろしている。

「この怪物をござらんない。Penseur. 年じゅうこうやほおづえって頬杖をついたまま考えています」という。また鐘楼へもどってはいる。左側にあるのがクリミヤから持ってきたいわゆるセバストポールの鐘、右側のがこのブルドン目方が幾キログラムある、中にさがった舌がいく

らいくらと説明する。鐘をゆり動かす仕掛けを見せてくれる。そばにあった鉄の棒でガンガンと軽く鳴らして見せました。特別の祭日でなくてはこの鐘はほんとうには撞かぬそうです。ユーゴーの小説の種にしたギリシア文字のらく書きはほんとうにあるかときいてみましたら、「今はもうありません。あなたもカジモドの話をお存じですね」といって、青い顔をして笑いました。

もとの入り口の所へ帰ると、さきに塔へ上った男がまた私と同様に内からドンドンたたいている。御免なさいといつてあけてやってまた鐘を見せに連れて行きました

た。

また次に御報いたします。きようはカルネバルの  
Mardi-gras ですからにぎわうことだろうと思います。

(明治四十四年三月、東京朝日新聞)

## パリから (二)

このあいだここのユーゴー博物館というのを見まし



た。ユーゴーの住まっていた家で遺物など陳列して公衆に見せているのです。ユーゴーの描いた絵がたくさんあってなかなかうまいものだと思心しました。この人の作物中の光景を描いたいろんな画家の絵もあります。「ミゼラブル」の中でファンテーヌが往来で乱暴な男に肩へ雪の塊かたまりをおっつけられるところもあります。これはユーゴーが実際に見た出来事だそうです。案内者が萌黄もえぎ色の背広いろを着た英国人らしいのに説明していました。萌黄の背広に萌黄の柔らかい帽子を着たこういう男にたいていな所で出くわすのは不思議なくらいです。ノルウエ

ーの船でもこんな男に会ったし、ヴェスーヴの火山でも会いました。いずれも巻き舌のような調子で「ウエル」とかなんとか言っているのです。階段の壁に額を掛けた印刷物の前に背の低い肩の怒った男が三人立って大きな声で読んでは何かしゃべっている。これははたしてドイツ人でした。細かい活版を一々読んでいるところがどうしてもドイツ人らしいと思いました。いろんなおもしろいものもありましたが急いで見たのでなんだかまとまった記憶がありません。暇があつたらも一度行って見たいと思っっています。

きょう（三月二十三日）はミカレームの祭日だそうです。パリじゅうのせんたく女の中でいちばん美しいのを、女皇に選挙して盛んな行列をやるというのでしたから、昼過ぎに近所の大通りまで出て見ました。人道のそばには至るところコンフェツチを包んだ紙袋を売っています、仮面や紙の塵ちりはら払いや鶏の鳴き声をする笛などを売っている。息を吹き込むとヒョロヒョロと象の鼻のように伸びるおもちやも売っている。町はたいそうな人出で巡查がおおぜい出て警戒しています。天気がよくて暖かくてなんだか東京の花見時分の心持ちでした。高い家の窓

から皆往来を見物している。派手な女帽子が目立つ。窓から時々コンフエツチを投げるのがちようど桜の散るような心持ちがします。時々長い紙ひもを投げる者もある。いろんな仮装をした群れも通る。子供が多い。そのうち行列の前駆に騎兵が来ました。ピカピカ光る兜かぶとに黒い髪の毛をたらしめている、キュイラシエと言うのだそうです。そのあとから楽隊が来る。止まったきりになつてゐる電車の屋根の上はいっぱいの人でそこから盛んにコンフエツチを投げる。楽隊のあとから奇妙な山車だしが来る。大きな亀かめの頭に煙突が立って背に鉄道の役人の人

形が載っている。これが左右にグラグラ揺れ動きながらやってくる。これは国有の西部鉄道の悪口だそうです。それからだんだんに各区の女皇の車が来る。女皇たちは皆にここにこして道の両側にキツスを投げかけている。ワアワアと見物人がはやす。日光が強いので暑そうに顔をしかめているのもある。いろいろの商業団体の旗も来る。それから古代の騎士の風ふうをした行列が続く。絵画、音楽、詩などを代表した花車も来る。赤十字の旗を立てた救護隊も交じっている。ずっとあとから「女皇中の女皇」マダムアゼルなにがしと言うのが花車の最高段の玉座に冠

をいただいですわっている。それからいろいろ広告の山車<sup>だし</sup>がたくさん来て、最後にまた騎兵が警護していました。行列はこれからリボリの大通りシャンゼリゼーのほうへ押し出すのだそうです。大通りは非常な混雑で、私も時々コンフエツチを投げつけられました。粗末なカフエーへは行って休んでいると、奥のほうの卓を囲んで四人の男女がマンドリンをひいて歌っています。一昨年始めて西洋の土地を踏んだ晩ゲノアの宿屋で夜ふけに窓の下でマンドリンをひきながら歌う者があった、その歌の調子がいかにも感傷的と言うのか卑俗と言うのか妙な

感じがしましたがきょうのもやはり同じ感じがしました。こういう調子はドイツでは聞きませんでした。帰って外套がいたうをふるったら室へやじゅうへコンフェツチがいったいに散らばりました。

四五日前オペラでグノーのファウストを聞きました。メフィストの低音が気に入りました。道具立ての立派で真に迫ること、光線の使用の巧みなことはどこでも感心します。音楽の始まる前の合図にガタンガタンと板の間をたたくような音をさせるのはドイツのと違っていて滑こつ稽けいな感じがしました。最後の前の幕にバレエがあります。

国にいた時分「スチユディオ」か何かに載せたドガの踊り子のパステル絵を見て、なんだかばかげたつまらないもののような気がしましたが、その後バレエというものも見、それからドガの本物の絵も見てから考えてみると、とにかくこの人の絵はこういう一種の光景、運動、色彩、感じというようなものをかなり真実に現わしたものだと思いました。

役者の唱歌は昨年ウィーンで聞いたほうがむしろよかったです。この事を同宿のドイツ人に話したら、オペラはドイツに限るのだと言っていばっていました。



ここではワグネル物をたとえば四幕のものなら二幕ぐら  
いに切って演じたり、勝手な事をすると言つてひどく憤  
慨していました。

(明治四十四年五月、東京朝日新聞)



日本文学電子図書館

---

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行

---



日本文学電子図書館